

奏で響く双撃槍（仮）

テスト

テスト投稿です。

ぼちぼち書いては投稿していくと思います。

話しが投稿される度に前話の文が変わっている事がありますが、ふと見直すたびに手直しが入ってるからです。

目次

奏で響く双撃槍（仮）

第2話

奏で響く双撃槍（仮）

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l |

崩壊するライブ会場。

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l |

止まない悲鳴の嵐。

G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l |

押し寄せるノイズの群れ。

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l z i z z l —

まるで地獄のようなこの光景を、あたしが忘れる事はないだろう。

3 奏で響く双撃槍（仮）

「あー！ また授業に遅刻するうー！」

ひたすらに走り続ける。

どこへ？

もちろん、教室だ。

昨日は木から降りられなくなった猫を助けて授業に遅れてしまった。

その時は先生に何とか謝り倒して見逃してもらったけれども！

二日連続で同じ先生の授業に遅れるのは良くない！

早く、早く、早く！

——着いた！

教室の前で息を整えてから、忍び足で入り込む。

音を立てないように横を通る私を見て、くすくす笑われているけど気にする余裕なんてない

全神経を総動員し、ようやく未来の隣の席に辿り着く。

全力疾走からの全力忍び足のおかげで、体育の授業の後みたいに汗だくだ。

「おかえりなさい、響」

「ただいまあ、未来う」

今日は、何とかバレーに済んだ！

良かった――

「――はい、それでは皆さん前に集まってください。それと、ようやく挨拶が出来ますね立花さん。おはようございます」

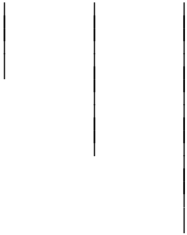
――あ。

「――お、おはようございます、先生！ 今日、とてもお綺麗ですね！」

「ありがとうございます。言い訳は後で聞きますので、貴女は授業後に残るように」

隣から呆れた溜息が聞こえる。

今日は、流石に許して貰えなかった――



お昼休み。

今日も変わらずおいしいご飯をいっぱい持ち帰り、未来がいるテーブルに着く。

「それで？ 今日は何があったの、響？」

「んうう。あふあね、ほれは——」

「響、ご飯は逃げないから飲み込んでから喋ってね」

「んぐ——。いやー実はね、木の上の巣から落っこちちゃった小鳥さんがいてね」

「その小鳥さんを助けてたの？」

「そうそう！小さくてふわふわで、とっても可愛かったなー」

「昨日は猫、今日は小鳥——助けるのは良い事だけど、授業に遅れるのは良くない事だからね」

「あはははは——ごめんね。でも、困ってる誰かを見ると身体が動いちゃうんだよねー」

「もう。響いたら本当に変な子なんだから」

「えへへ、変な子と仲良くしてる未来はもっと変な子！」

いつもと変わらない風景。

いつも傍にいてくれる親友。

きっと、この日常がいつまでも――

「あれ、風鳴翼じゃない？」

「――本物だわ。学校に来る事、あるのね」

――風鳴翼。

反射的に立ち上がり、辺りを見渡す。

「――どうしたの、響？」

——いた。

遂に、会えた。

リディアンが誇る、超人気アイドル。

翼さんがこの学校にいると知って、私はここへの進学を決めた。

現役アイドルにお近づきになりたくて？

——違う！

私は、あの日の——二年前の真実を知りたくて。

その一心で、私は——！

「——貴女」

はっ、と気が付いた時、翼さんは私の目の前にいた。

頭の中で考えていた事が崩れる。

言わなきゃ！

聞かなきゃ！

「あ、あの！ 私は――」

「ここ。それと――ここも」

「――へ？」

翼さんは、自分の唇の横と、鼻を指す。

「とても言いにくいんだけど――色々着いているわよ」

「ひっ、響！ こっち向いて！」

「んえっ？ 未来？」

「——貴女達、仲が良いのね」

慌てたような未来に、顔を拭かれる。

やがて私の顔から離れたハンカチには、新しくオレンジ色の模様が仲間入りしていた。

どうやら、ご飯に夢中で鼻の頭にまでソースが付いていたらしい。
そして、翼さんが何を指していたのかを理解する。

「——ッ!? あ、あにや、あによ、す、しゅみませんッ!」

顔が燃えるように熱い。

今すぐ家まで走ってベッドに飛び込んで顔を埋めたいくらいに。

「いえ、こちらこそごめんなさい。——仲が良い友人はかけがえのない物よ。大切にしたほうがいいわ。お互いにね」

翼さんはそう言っ、静かに食堂から去って行っ。

完全に翼さんの背中が見えなくなっ、ようやく張りつめていた空気がなくなる。一方私は、そのまま座り直してから顔を上げられなかつ。

見てないけど、周りから見られている気がする。

「なんで——なんで言ってくれなかつたの、未来う」

「——ごめんね。気付いていたけれど、拭く前に響が立ちあがっちゃっ」

「うう、絶対翼さんにすごく変な子だと思われた——」

「それは大丈夫だよ、響」

響はソースが付いていなくても、すごく変な子だから。

未来、それは酷いよ――

――

――

――

放課後。

思い返しても酷すぎる翼さんとの初対面で、私はすっかり忘れていた。
翼さんのCDが、今日発売だって事を！

初回特典が充実していて、売り切れになっていてもおかしくない逸品。
リディアンから街のCD屋さんへと急ぐ。

今日は朝から走ってばかりの一日だ。

「はあ、はあ、CD屋さんまでもう少し——あれ？」

ふと、足が止まる。

私はリディアンからここまで駆け抜けてきた。

どうして誰ともすれ違わなかった？

それは道に歩いている人がいなかったから。

——何か、変だ。

改めて、周りを見してみる。

まるでゴーストタウンのような、いつもの街並と。

見える範囲だけでも、いくつもの大量に積もった黒い塵が——

「——ノイズッ!？」

「きゃあああああああッ！」

ひたすらに走り続ける。

どこへ？

助かるならどこでもいい！

一分でも、一秒でも！

早く、早く、早く！

「頑張つて！ きっと助かる——いや、絶対助けるからッ！」

今私が力尽きたら、命を落とすのは私だけじゃない。

お母さんとはぐれたこの女の子の命まで消えてしまう。

——そんなの許せない！

——そんな物、認めちゃいけない！

だから！

走り続けるんだ！

『生きるのを諦めるなッ！』

あの時、私にそう言ってくれた人がいた。

だから私も——！

「絶対に諦めるもんかッ！」



どれほど走ったのだろう。

この子を見つけた時はまだ夕日が見えていた気がする。

それが今は、空に星が輝いている。

無我夢中で走っていたから、どこを通過してここまで来たのか全然覚えていない。

でも、一つ確かな事は、ここはどこかの工場地帯で。

私たちは結局——ノイズに囲まれているという事だ。

「お姉ちゃん、私たち——死んじゃうの？」

しがみついて震える女の子がぼそりと口に出す。

死ぬ——私たち、死ぬ？

あれだけ走って逃げたのに？

この子のお母さんにも会えてないのに？

ここでノイズに殺されて死ぬの？

——違う！

生きる事を諦めなければ、出来る事はある！

「——大丈夫！」

「え？」

あの人が歌っていた歌を思い出す。

力強くて、暖かくて、優しい歌。

「私が守るから」

だから――

「生きるのを、諦めないでッ！」

そう叫んだ瞬間。

胸の奥から、歌が聞こえた気がした。

Balwisyall Nescell gunnir tron――

身体が熱い。

まともに立ち上がる事が出来ない。

頭がかき回されてるみたいだ。

なのに、歌だけがはっきりと聞こえてくる。

「—— ツツ!! —— アアアッ！」

身体も、頭も、私の全てがひっくり返されているような感覚。

「お、お姉ちゃん——？」

こんなに私がぐちゃぐちゃになっているのに。

胸から奏でられる歌が止まらない。

「グウウウウ、グアア、アガアアアッ！」

私の身体が歌に覆われていく。

それは私と言う存在が、歌そのものになっていくように。

やがて、歌に飲み込まれた私の中には、胸の歌だけが響いていた――

とある病院の一室。

その部屋のベッドには、二年前から意識を閉ざした少女が横たわっている。しかし今、その手は何かを探すように空中を泳ぎ、その目は眩しい物を見るように薄く開いていた。

「——あ」

錆びついた喉から、声のような音が出る。

まるで、失った何かを確かめるかのように。

そして——

「——ガン、グ、ニー、ル？」

——運命は再び、少女を迎え入れる。

第2話

「反応絞り込みました！ ですがこれは――」

「ノイズとは異なる高質量エネルギー、なおも増大中！」

「――聖遺物の暴走だとしても言うのか!? だが、あんな場所に聖遺物など――」

「このパターン――これってまさか、アウフヴァツヘン波形？」

スクリーンにデータバンクと一致したコードが表示される。

それは私の良く知る聖遺物。

それは二年前に私の前で砕け散ったもう一つの力。

それは、今も眠り続けている――

「馬鹿な、ガングニールだとッ!？」

「――!!――ッ!」

「翼ッ!? 待てッ!」

考えるより先に走り出していた。

何かの間違いかもしれない。

それでも私は行かなくてはならない。

あの日、ガングニールは永遠に失われた。

しかし、何かの間違いで今そこにそれがあるのなら。

いつか必ず帰ってきてくれる人の為に――!

「クソッ、もう止まらんか！——全職員に通達！大至急、市民を聖遺物及びノイズから遠ざけるんだッ！急げッ！」

「了解！——司令！二課へ緊急の通信が入っています！」

「——よりもよってこんな時に！どこの誰からだ！」

「それが、二課医療施設から——」

——

——

——

少女の視界を埋め尽くしていたノイズたち。

それが、今は殆ど残っていないかった。

黒い影が飛び込む度、塵になって消えていく。

唐突に現れた山のような大きさのノイズも、一瞬で影に引き裂かれて消滅した。もはや、少女が炭素の塊にされる事はない。

ノイズも残り僅か。

それすらも、見ている間にいなくなるだろう。

しかし、少女の身体は震え続けている。

「ハアーツ、ハアーツ、ウウウアアアツ」

「お、お姉ちゃん。もう、ノイズはいなくなったよ」

「グウウウウウ、ウウウウウウツ」

「私は、もう大丈夫」

——黒い、人型の怪物。

現場に辿り着いて見た物がそれだった。
ノイズなど、ただの一匹もいなかった。

この怪物がノイズを倒したのか？
それとも、これは新種のノイズ？

——まさか。

「——これが、ガングニール？」

茫然と、口から零れる。

私の知っているガングニールは、こんなにも恐ろしい姿ではなかった。

間違っても、こんな物では――

「――！――！！」

「ッ!? 生存者!?」

怪物を端に捕らえながら、辺りを探す。

――いた！

小さな女の子だ。

近くへ寄ると、震えながら座り込んでしまっている。

幸い、大きな怪我はないように見える。

「もう大丈夫よ。助けに来たから――」

「助けて――お願い、助けて！」

「——怖かったのね。すぐに安全な所に連れて行くからね」

「違う、違うの。お姉ちゃん、助けて」

——もしかして、どこかにまだ家族が？

「お姉ちゃんが、お姉ちゃんが！」

「——うん、わかったよ。私がお姉ちゃんを助けてくるから、お姉ちゃんは今、どこにいるかわかる？」

「あのね、ノイズがたくさんいて、お姉ちゃんがね」

そうか。

この子の姉がノイズから妹を庇ったのか。

ならば私は、せめてこの子の傷を少しでも小さな物に――

「お姉ちゃん、ノイズをやったのに、元のお姉ちゃんに戻らないの！」

——ノイズをやっつける？

——元に戻らない？

どういふ事だ？

よく見れば、女の子は私を見ていない。

まるで「お姉ちゃん」がその先に今もいるかのよう。

震える手で、「黒い怪物」を指差している。

「お願い、お姉ちゃんを、助けてッ！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアッ
ツツツ！！！！！！！！！！」

一体、ガングニールはどこに？

この子は、何を知っている？

「お姉ちゃん」を助けるとは？

答えの出ない疑問がどんどん湧いてくる。

しかし――

「考えている暇はない、か」

I m y u t e u s a m e n o h a b a k i r i t r o n

E
m
u
s
t
o
l
r
o
n
z
e
n
f
i
n
e
el
z
i
z
z
l
|

G
a
t
r
a
n
d
i
s
b
a
b
e
l
z
i
g
g
u
r
a
t
e
d
e
n
a
l
|

E
m
u
s
t
o
l
r
o
n
z
e
n
f
i
n
e
el
b
a
r
a
l
z
i
z
z
l
|

G
a
t
r
a
n
d
i
s
b
a
b
e
l
z
i
g
g
u
r
a
t
e
d
e
n
a
l
|

——歌が、聞こえる。

私の胸の奥から、何度も音が奏でられる。

私と言う音だけが、私の中に響き渡っている。

奏で響きあう音は歌となって、世界を満たしている。

歌が世界を満たし、世界も歌う。

そこには歌だけがある。

私は、その音を奏でるだけの箱。

——どうして、そう思う？

それは、自分の歌がないから——

——違う。歌ならある。私が気付いていないだけだ。

I
m
y
u
t
e
u
s
a
m
e
n
o
h
a
b
a
k
i
r
i
t
r
o
n
—

——歌が、聞こえる。

私の胸の奥からじゃない。

——それは、私の歌ではない。

私は聞いたことのない歌。

——けれど、私は知っている歌。

初めて聞くはずなのに、とても懐かしいような気がする。

「天、羽々斬？」

知っている。

私は知らないのに、私の中の何かはその歌を知っている。

C r o i t z a l r o n z e l l g u n g n i r z i z z l —

——歌が、聞こえる。

『おい死ぬなッ！ 目を開けてくれ！』

『生きるのを諦めるなッ！』

『——いつか、心と身体、全部を空っぽにして思いっきり歌いたかったんだよな』

これは、私の記憶？

それとも、私の胸の中の——

『今日は、こんなにあくさんの連中が聞いてくれるんだ』

『だからあたしも、出し惜しみなしで行く』

『とっておきのをくれてやる』

『——絶唱』

『G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l——』

『E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l——』

——ああ、そうだった。

あの人の歌は、本当に綺麗で。

とても、透き通っていて。

そして、少し寂しかった。

そんな歌を聞いて私は、何か——何か、を。

何故だろう、思い出せない。

あの時、私は何を——

『G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a l——』

『E m u s t o l r o n z e n f i n e l z i z z l——』

「――あなたは、この何かを知っているの？」

自分の胸、更にその奥へと語りかける。

いつかきつと、教えてくれると信じて。

だから、私は歌うんだ。

あの人から受け取った、私の歌を――

B
a
l
w
i
s
y
a
l
l
N
e
s
c
e
l
l
g
u
n
g
n
i
r
t
r
o
n

――

――

――

「——ふっ！」

「ガアッ!? ——ウガアアアアッ！」

——まるで獣。

峰打ちでは止まる気配もない。

かと言って、斬りつけるなど以ての外。

影縫いも刺さる前に落とされてしまう。

正直、あまり打つ手がない。

一先ずは、目をこちらに向け続けてもらうしかないだろう。

「このまま、この場に留まっていってくれば良いのだが——」

「ウガアアアアア、アア、ア、ガ？」

「——む？」

常に動き回っていた身体が、不自然に止まった。
警戒を続けながら、ゆっくりと足を進めていく。
黒い怪物は、胸を抑えながら唸っていた。

「ウウウ、うううううう、歌、歌が聞こえ、ル」

「——歌？」

「あの人の、歌、私の、歌」

Balwisyall Nesceलगुनिर्तरोन——

「——聖詠ッ!？」

黒に染まった身体から、影が引いていく。

胸に吸い込まれるように全ての影が消えると、そこにはどこかで見た子がいた。ただ記憶の中の彼女と決定的に違うのは、自分の物に似た機械のパーツが身体に装着されている事だ。

「纏っている、それは——シンフォギア？」

「——そっか、そうなんだ。これは、あの人の——」

「貴女、その力をどうやって——」

「お姉ちゃん！」

震えていた少女が飛びつく。

それを、シンフォギアを纏う彼女は抱きしめ受け止める。

「ごめん、ごめんね。怖かったよね」

「——怖く、なかったよ。お姉ちゃん、かっこよかったよ」

「——そっか、うん、ごめんね、ありがとう」

涙を流しながら抱き合うその姿は、まるで本当の家族が再会したようだった——

「——よもや、こんな時になんてな」

二課司令、風鳴弦十郎は眉間を手で押さえながら呟く。

聖遺物の暴走という非常事態が起こった直後に、二課医療施設より弦十郎へ届いた緊急通信。

弦十郎は、その内容次第では二課司令という立場を無視して、通信の切断まで考えていた。

しかし、通信は最後まで続けられ、医療施設へは友里と緒川が派遣された。

「失われたはずのガングニールの反応と、目を覚ましたお前」

「——俺は、これを偶然で片づける程ロマンのない映画ばかり見た覚えはないぞ」

翼にはどのタイミングで切り出した物か。

この事を伝えれば、また飛び出していくだろう。

「手放して喜べない立場ってのは、案外苦しいんだぞ。——なあ」

——奏。

奏で響く双撃槍（仮）

著者 テスト

発行日 2020 年 12 月 4 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/213513/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
